

組織と情報コミュニケーションにおける「影響関係モデル」の提案 Proposal of "Relational model of being influenced" in organization and information communications

飯箸泰宏* 矢ヶ部一之**
Yasuhiro IIHASHI Kazuyuki YAKABE

*明治大学 **跡見学園女子大学
Meiji University Atomi University

あらまし: 情報コミュニケーションとは「あやかし」や「洗脳」、「催眠」などのことではない。これらの一部の誤解が情報コミュニケーション不要論さえ惹起しているようだ。ここではメッセージが表出され、解釈されるだけかという疑問に答える新しい情報コミュニケーションモデルを提案する。これまでも多数のモデルが提案されているが、組織成立の基本的要件の一つである「影響関係」こそ、情報コミュニケーションの本質であることを主張する。

キーワード: 情報コミュニケーション 影響関係 情報組織論

1 はじめに

情報コミュニケーションに関するモデルはたくさん存在する。これらのモデルは、情報コミュニケーションが社会組織(人の組織)の中で行われているという具体性を捨象しているようである。

代表的な過去の情報コミュニケーションのモデルを通観し、社会組織のモデルの中に情報コミュニケーションのモデルを再構築することを試みたい。すなわち、社会の中の情報コミュニケーションとは何かを位

置けるとともに、情報コミュニケーションの本質が人と組織の「影響関係」であることを提案する。

2 社会組織と情報コミュニケーション

2.1 社会組織のモデル

飯箸の提案する社会モデル[1] [2]は、下図のとおりである。一人のヒトはいくつもの組織(ユニット、単位組織)に参加することができる。組織は定常流的

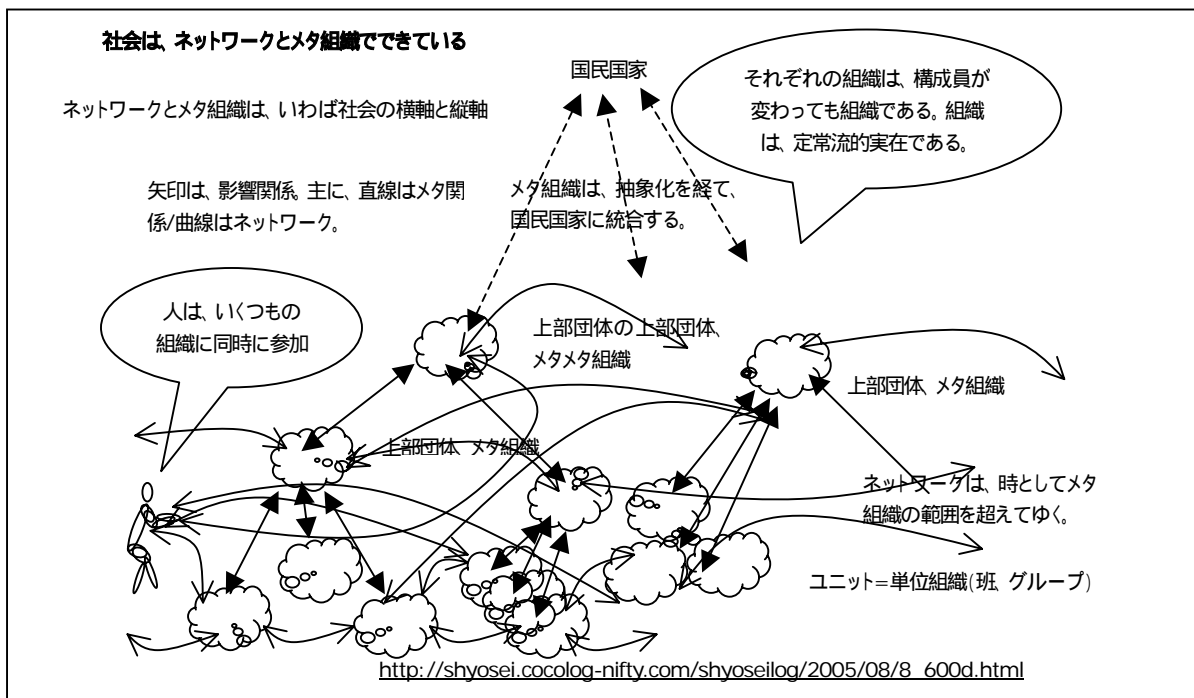


図1 飯箸の社会組織モデル

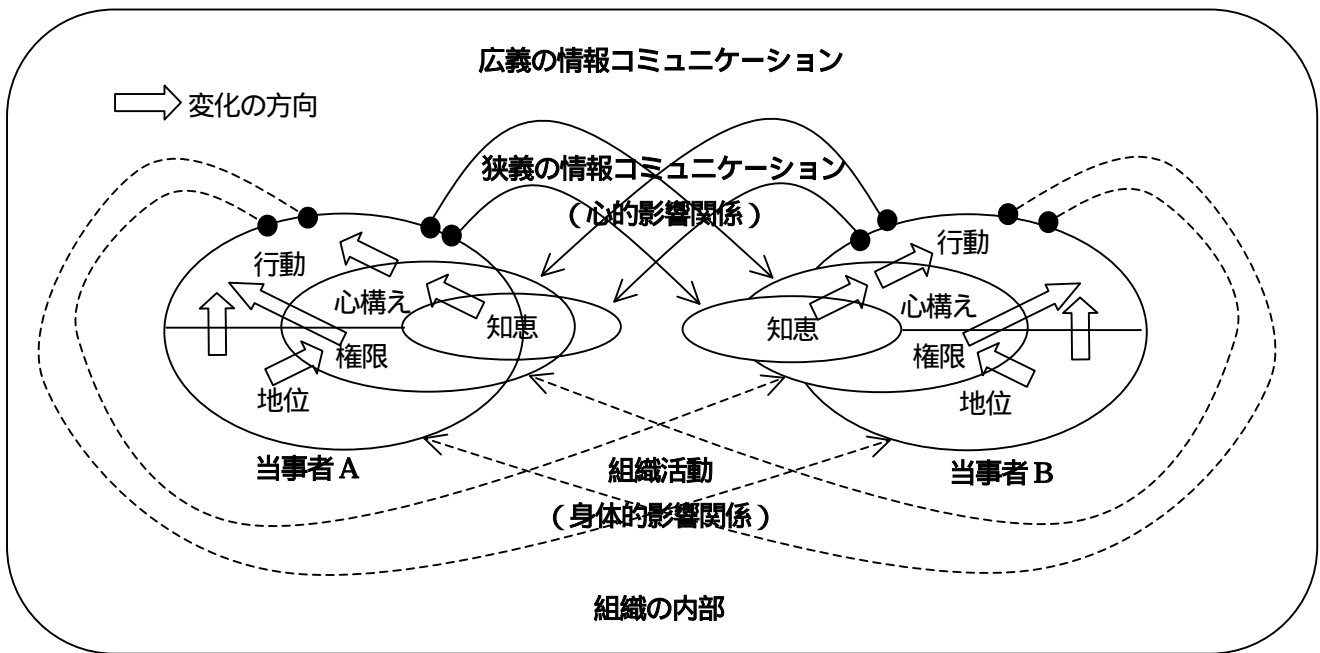


図2 飯箸の情報コミュニケーション（影響関係）モデル

な実在である。しかも、ヒトとヒト、ヒトと組織、組織と組織の間に影響関係（変化させあう関係）が累積されているという認識が組織を成立させている。

2.2 一方向性は許されるか

コミュニケーションには一方向性のものと双方向性のものがあると長く言われている。確かに場面や時期を限ってみれば、双方向性の強いコミュニケーションと弱いコミュニケーションがある。しかし、人々は、一方向的な情報の受け手であり続けることはよしとしていない。原始の社会でも敵の接近を発見して警告の叫びを上げる見張り役でさえ、役立たずであれば群れによってお役ごめんになってしまったのである。一方的な宣伝だけに終始する独裁者はやがて打ち倒される。情報コミュニケーションにおいて直接的双方向性が十分でない場合には、発信者を社会や組織が選任または解任によって、反作用を与えることになるのである。

2.3 情報伝達から情報相互解釈へ、情報相互解釈からその次の関係へ

電話機や無線機を手本にした情報伝達モデルが長く使用された（たとえば[3]）。1954年代中頃からは、相互に解釈できることが重視され、情報コミュニケーションには発信者と受信者による解釈が伴うということが叫ばれるようになった（たとえば[4]）。しかし、「解

釈」だけでは不十分である。

3 情報コミュニケーションは影響関係の部分

ヒトはすべて何らかの組織に属しているが、組織は互いに影響しあう関係の記憶と未来予測の累積によって人々の概念の上に存在している。たとえ、ある情報が一方向性の情報でしかなく見えても、その場合は発信者そのものを取り替えたり、取り替える可能性が予測されるために影響関係が完結しているのである。影響関係が完結して組織は成立する。影響関係が完結して情報コミュニケーションは完結する（図2）。

参考文献（既発表資料）

- [1]飯箸泰宏、『組織破断限界シミュレーションの試み』、SH 情報文化研究会・明治大学情報科学センター共催、2005.12.10.
- [2]飯箸泰宏、『一人にしない教育者と、一人にしない教育を』、第4回次世代大学教育研究会、2006.1.27.
- [3]Shannon, C. & Weaver, W. (1949) *The Mathematical Theory of Communication*.
- [4]Schramm, W. (1954) 'How communication works.' In Schramm, W. (ed.) *The Process and Effects of Mass Communication*.